

時代小説の作家は何に留意して作品を構築しているのか

萩原 義雄

時代小説の特徴

時代小説とは、過去の時代や人物、出来事などを題材にして書かれた日本の小説をいう。現代では、明治時代以前の時代(主に江戸時代)を対象とした作品が多くその時代対象として描かれてきている。

関連書には、

大村彦次郎『時代小説盛衰史』筑摩書房 ISBN 4480823573

関川夏央『おじさんはなぜ時代小説が好きか』岩波書店 ISBN 4000271040

目次

第一章 「小僧」は神様を信じない——山本周五郎

「万治の変」とはなにか／古典と時代小説／時代小説のえがく時代／「戦後」

の終わり時代小説の登場／流動する経済から見える伊達騒動／悪玉の「陰謀」、善玉の「忍従」／反「学校」文学、反「友達」文学／「小僧」とは誰か／「挫折した良血のエリート」という物語／天災という転機／「曲軒」周五郎／米経済からの構造変換／「解説」について／現代日本と周五郎の道程



第二章 吉川英治の『宮本武蔵』と「修養主義」

大衆化と教養主義の時代／武蔵像にあらわれる作家の本質／読者と交感する大衆小説／なぜ武蔵は女性から逃げるのか／近代大衆社会の落とし子／母性への愛着と恐怖／美男につめたい大衆小説／時代の子としての武蔵／表現のダイナミズム／時代小説は古臭い？／時代思潮としての古典への傾斜／時代精神のありかた／もうひとつの業績

第三章 「戦後」を問いつづけた司馬遼太郎

「戦中派」という原点／読者に発見された作家／新選組のイメージ／アジテーターと原理主義者／司馬遼太郎の新しさ／「天才」は孤立した現象にすぎない／反近代文学と「おかしさ」／血統主義と実力主義／大陸アジアの「私」／果敢な作家

第四章 「海坂藩」の原風景——藤沢周平

センチティブな人／生と死の境界域で／藤沢文学の本質／巧みな作家から愛される作家へ／化政期という現代の原型と『蟬しぐれ』／「内面」とは無縁の世界／時代小説の典型／東北地方の明るさ／ユートピアの歲月

第五章 山田風太郎——その教養と奇想
表現者のオリジナリティ／風太郎『八犬伝』の構造／芸術と実生活／虚実冥合の瞬間／化政期の成果とその喪失／奇想を生んだ脳髓も老化する／日本型近代のありかた／ピエル・ロチの「オリエンタリズム」／小説の継承と発展／無知に個性はない

第六章 「侠客」その孤影と集団の両像——長谷川伸、村上元三など

「現場あがり」の作家／誰のために書くのか／景気と文学／股旅と「渡り鳥」／義理、人情、恩／聞くものな「見得」／作品の受容、変形、相互作用／人を救うということ／義侠心の再評価／次郎長伝説のなりたち／偉大な空白としての次郎長／なにを失ったのか／受けつがれて成長する物語

第七章 「おじさん」はなぜ時代小説が好きか——森鷗外ほか

中世人の心情とモラル／歴史小説の出発点／日本型近代から西欧型近代へ／「反動」から生まれるもの／歴史的生物としての日本人／「進歩」への疑い／成長疲れ／新しい時代小説家たち／「おじさん」という大陸

参考資料

あとがき

レクチャーをしたときも相手はわりあい若い編集者たちでしたし、若い人向けの本にしたいという願いはたしかに当初からありました。しかし、自分に似た人、昔若かった人、つまりおじさんに向けてという気持もまた頭の隅にはあったのです。時代小説におもしろさを感じ、また同時に、時代小説をおもしろいと思う自分とはいったい何者なのだろうとつい考えてしまう人であれば、若くても多少古びていても、みな読者だと私は思っていたのでした。

関川夏央(せきかわ なつお)

作家：一九四九年、新潟県生まれ。上智大学外国語学部中退。『海峡を越えたホームラン』(双葉社、1984年)で第7回講談社ノンフィクション賞、『坊っちゃん』の時代』(双葉社、1987-1997年)で第2回手塚治虫文化賞を受賞。二〇〇一年には、その「人間と時代を捉えた幅広い創作活動」により第4回司馬遼太郎賞を受賞した。『昭和が明るかった頃』(文藝春秋、2002年)で第9回講談社エッセイ賞を受賞。主な著作に、『砂のように眠る』(新潮文庫、1997年)、『戦中派天才老人・山田風太郎』(ちくま文庫、1998年)、『本よみの虫干し』(岩波新書、2001年)、『昭和時代回想』(集英社文庫、2002年)、『司馬遼太郎の「かたち」』(文春文庫、2003年)、『二葉亭四迷の明治四十一年』(文春文庫、2003年)、『現代短歌そのころみ』(NHK出版、2004年)、『新装版ソウルの練習問題』(集英社文庫、2005年)など。

本文からの抄出

◆時代小説のえがく時代

時代小説がどの時代をえがくかという点、一般論としてですけれども安定していたと認識された時代をえがきます。つまり江戸時代ですね。そして、二百七十年もある江戸時代でも、さらに安定した文化的成熟期を舞台に採ることが多いのです。文化・文政と天保年間です。文化元年は一八〇四年、文化、文政、天保、弘化、嘉永、安政と時は移りますが、弘化以降、一八五〇年代から先はあまり選ばれない。世の中がかわりはじめるからです。嘉永年間から外国船が盛んに来るようになる。世界が日本をもう放つておいてはくれなくなり、革命機運が少しづつみなぎってくる。その時代からはいちおう幕末小説という別のものになります。時代小説は安定した社会の安定した暮らしをえがくのが目的だから、そぐわなくなってしまうのです。(7頁)

◆化政期という現代の原型と『蝉しぐれ』

『蝉しぐれ』が時代小説でなかったら、ちよつと恥ずかしくて読めないかも知れません。ところが時代小説ならすらすらと読める。ばかりか、さわやかに読める。それは「内面」というものが描かれていないからです。作者自身「内面」を信用していないからです。(120頁)

書評家の岡崎武志さん[2006年03月09日]

★おもしろいタイトルですが、たしかにおじさんは時代小説が好き、です。古本屋さんに話を聞くと、いま時代小説の文庫は売れ筋で、市場でもけっこういい値で取引されているそうです。確実に売れる商品で、しかもほかの文庫は一〇〇円に値下げしても、時代小説の文庫は値下げしなくても売れる。半額ぐらいでちゃんと売れていくというからありがたい商品です。新刊書店でも、本は売れないのに、時代小説は売れる。この本のなかでも、司馬遼太郎の『燃えよ剣』の文庫が、八十九刷で帯に「三百九十万部と謳ってある」と著者が驚いています。買うのはやはり圧倒的に中高老年の男性です。だから、ほんとはおじさんとおじいさんは時代小説が好き、と言ったほうが正しい。あんまり、女子高生でカバンの中にケータイと一緒に藤沢周平を入れている子はいませんね。

★この本は、これまでになかった視点で、司馬遼太郎、山本周五郎、吉川英治、藤沢周平、山田風太郎などの時代小説が読まれる背景を分析した本です。ふつう、司馬、藤沢に池波正太郎を入れて、時代小説御三家と言われますが、なぜか池波正太郎は入っていない。時代小説は現代小説の変種、というのが著者の時代小説観。近現代小説ではできないことを時代小説というかたちを借りて書く。

★司馬遼太郎『燃えよ剣』とそのドラマ化された番組が、その後の新撰組のイメージの原点となりますが、それは何かというと「新撰組が青春もの」だということ。だからドラマに関しては、当時の安保世代の学生に受けたいいます。同じく藤沢周平の『蟬しぐれ』、これもドラマ、映画になりましたが、本来なら、主人公の青年の素直さや、友情やほかない恋は、近代小説では書かれぬ約束だった。それから時代小説に出てくる「義理」と「人情」も、いまの小説で書くとなると気恥ずかしい。それも「時代小説」というかたちを読むと、すらすら読める。「セカチュー」に代表される、いま流行りの恋愛小説を、おじさんは読めないが、時代小説に出てくる恋ならわりと感情移入しやすい。おじさんが時代小説を読む理由の一つです。

★経済や政治など、社会科学的な視点で時代小説を読むのもこの著者の特徴。『蟬しぐれ』は、鶴岡藩をモデルにした海坂藩を舞台にした小説で、鶴岡藩は土壌と水に恵まれ、開田意欲も高い、経済的に裕福ではないが安定した。これをモデルとした海坂藩を著者は「経済成長なきユートピア」と表現する。時代小説がよく読まれるようになった昭和30年代、高度経済成長と進歩に追いついてサラリーマン生活を送った人達には、この日本の原風景が慰安となる。また、主人公文四郎の養父は、政権争いのなかで、切腹をする。腹を切ることで家名を守る。この古風な道徳も、「近代的自我」の束縛から自由という意味で、読者にはかえって「新しさ」として映ると言います。

★ほかにも時代小説について、おもしろい指摘がいくつもあります。例えば、「一般に大衆小説と呼ばれるジャンルでは意外にも美男に つめたいのです」と著者はいう。例えば吉川英治の作ったヒーロー『宮本武蔵』は、野蛮な顔だちで、同じ村出身の又八は美男がゆえに災難を招き、自分を確立できない人間として描かれている。その宮本武蔵は、山本周五郎も「よじよう」という作品に登場させていますが、山本の書く武蔵は「最後の最後まで見栄っ張り」で、これは吉川英治の書いた武蔵への皮肉だと言っています。

★山本周五郎も吉川英治も司馬遼太郎も藤沢周平も、みんな実社会での勤め人としての経験を持ち、よってサラリーマンをバカにしていない。これもサラリーマンが読んで好感を持つ点です。「彼の武家ものは時代を違えたサラリーマンものといえるでしょう。ただし、屈辱と策謀に対しては敢然と剣を抜き放つサラリーマンです」と藤沢周平について言います。剣を抜けない現代のサラリーマンはそこがすかすとするんでしょう。

★著者には司馬遼太郎についての著作はありますが、時代小説の専門家ではない。その分、見方が柔軟で、非常に新鮮に映ります。この本を読んでいると、おじさんたちが最近の芥川賞や直木賞作品に手を出さず、もう亡くなった著者たちの書いた時代小説を読むのもあたりまえかな、という気になってきます。

時代小説と歴史小説の違い

明治時代以前の日本、主に江戸時代を舞台とする小説。歴史との関わり方によって「歴史小説」と区分されるが、具体的な境界線があるわけではない。一般的には以下のような構図で理解されている。

歴史小説

「歴史」が主題である小説。史実に即した形で描かれる。

時代小説

「歴史」を物語の背景あるいは借景とする小説。あまり史実にはこだわらない。

もつとも、「史料の空白部分」というのは必ず存在するものであり、そこを埋めなくては作品は成立し得ない以上、「史実」の語をどう取るかは曖昧な部分がある。

もちろん「史実」から大きく離れたものを「歴史小説」と呼ぶことはほぼないが、「史実」に非常に近いものでも「時代小説」と呼んでいることはよくある。

文芸評論家の福田宏年さん『戦国城砦群』井上靖著・文春文庫の解説によると、日本の文壇および読書界では、森鷗外の昔から、「歴史小説」歴史其儘↓純文学、時代小説「歴史離れ」↓大衆文学」という考え方が定説化していたようだ。「はてなダイアリー」より」

そして、「時代小説」に対しては、こんな意見もある。

問題なのは、時代小説が文壇の中心だった頃に、読書していた人間が今、おじさんになっているということ。現在の時代小説氷河期に読書している若い世代が年をとっておじさんになった時に時代小説を読むかといったら、そうはいえない。そう考えると七名のような作家が登場し、若者が読む次世代の時代小説の書き

手、そして読み手が育たない限り、時代小説の未来は暗い。

という。果たして、時代小説は現代の若者にどう影響を与えていくのであろうか。皆さんと実際に向き合って考えてみたい事柄でもある。

時代小説の文献資料を最後に記載しておくこととする。

《歴史小説・時代小説 リンク》

時代小説ワールド <http://www.people.or.jp/~yakome/jidai/>

時代小説SHOW <http://www.jidai-show.net/>

湘南文庫 <http://www.netlaputa.ne.jp/~y-shima/>

時代小説ファンページ <http://www.geocities.co.jp/Milkyway/2304/index.html>

歴史小説の部屋 <http://city.hokkai.or.jp/~masato/>

おがさわらなる心のお気に入り時代小説のページ <http://www.tky.3web.ne.jp/~naruhiko/jidai/>

鏡之草紙 <http://www.l1.freeweb.ne.jp/novel/tokoshie/>

千石屋 <http://www.ne.jp/asahi/rekisi-jank/sengokuya/ie.htm>

夢殿 <http://www.din.or.jp/~jun14k/>

御宿かわせみの世界 <http://www.ne.jp/asahi/on-yado/kawasemi/index.html>

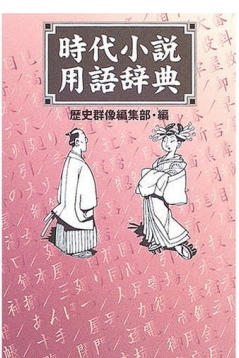
響庵『剣客商売』 <http://www.geocities.co.jp/Bookend/3464/>

鬼平・梅安の世界 <http://www.asahi-net.or.jp/~la7m-ymnk/>

河童ヶ淵(池波正太郎) <http://homepage1.nifty.com/saga-t/index.html>

池波正太郎 <http://plaza22.mbn.or.jp/~koujis/syotaro/ikenami.htm>

山本周五郎商店 <http://w33.mtci.ne.jp/~qwer/yamamoto/index.html>



<http://www3.plala.or.jp/booze-up/bakumatu-page/goryouka.htm>

しぼりちゆう <http://member.nifty.ne.jp/sibaryo-bunko/index.html>

司馬遼わあるぶ <http://www.geocities.co.jp/Berkeley-Labo/2181/index.html>

山田風太郎事典 http://home7.highway.ne.jp/f.o/Yamada_Futarou/topmenu.htm

山田風太郎先生愛のお部屋 <http://members.tripod.com/~yoshino/huutarou/>

海坂版日月抄 <http://www.people.or.jp/~unasaka/>

残日録 <http://www.aianet.ne.jp/~yokoyana/>

せきね(鶴岡市関根から) <http://www2b.biglobe.ne.jp/~kokichi/>

ひよろ藩 <http://www2s.biglobe.ne.jp/~hiyoko/>

文庫で読む人物史 <http://www.ask.ne.jp/~morioka/novel/novel.html>

鑑往知来 <http://www2u.biglobe.ne.jp/~kuhara/>

[平成花子の館](#) → [「時代小説」の部屋](#)

<http://www.geocities.co.jp/Bookend-Ryunosuke/7865/>

平成の時代小説

浅田次郎著『壬生義士伝』(「週刊文春」一九九八年九月三日号から二〇〇〇年三月三〇日号所載、文藝春秋刊)を中心に情景描写を解析しておく。 http://www.odette.or.jp/kankou/bu.c_bu_mb_mi.i/bu.c_bu_mb_mi.i.html

本書は、『鉄道員(ぼっぼや)』などの作品で知られる直木賞受賞作家、浅田次郎さんの作品。構想20年、著者初の時代小説で、週刊文春に平成10年9月3日号から平成12年3月30日号まで連載されました。

作品は、明治維新から半世紀を経た、初の平民宰相原敬が誕生した頃に、一人の新聞記者が、主人公の南部藩士・吉村貫一郎を知る人たちを訪ね、聞き書きをするという構成がとられています。

貫一郎を知る人たちの回想の間に、貫一郎の独白が南部方言にて随所に盛り込まれており、愛してやまない故郷盛岡の情景が語られます。作者浅田次郎さんは、四季に分け盛岡に取材に來られたとのことで、綿密な考証のもと、方言や町の雰囲気など、実際に盛岡に住んでいる人間が思わず感心してしまうほど、生き生きと登場する人物描かれています。あなたもいつか、この本を片手に、主人公貫一郎が「日本で一番美しい」と言い放つやまぬ盛岡の街を歩いてみてはいかがでしょうか。

〈あらすじ〉

主人公吉村貫一郎は、尊王讓位に邁進すると称して南部藩を脱藩し、新選組隊士となるが、内実は生活苦によるもので、貫一郎の願いは少しでも多くのお金を、故郷に残してきた妻しづと子どもたちの許へ送り届けること。しかし、貫一郎は、鳥羽伏見の戦いの最中、皮肉にも嘗ての幼馴染みで大阪蔵屋敷の差配役を務める大野次郎右衛門の命で、切腹させられることになる。その五十年後、一人の新聞記者が貫一郎を知る人たちを訪ね、「壬生浪(みぶろ)」と呼ばれた新選組にあつて昔一人「義」を貫き通した知られざる貫一郎の姿を浮き彫りにしよう。

〈ことばの実際〉

- 蝸ひつしが人間どもを嘲るようになかなかと鳴く。夕暮れどきだったな。「上巻47①」
- 「盛岡にも、ことよく似たところがありまして。ずっと小さな橋ですけれど、こういう擬宝珠がついているのです。秋は紅葉、冬は雪景色、そして春になると真白な辛夷こしがしの花が咲いて……」言いかけて、吉村はまた声を詰まらせました。「上巻80⑤」
- 夾竹桃きやくちゅうとうが屯所の庭に暑苦しい花を咲かす、夏の午下りだったと思う。「上巻87④」
- 大手前の石割桜の蕾が薄赤くふくらみ、東の山裾には杉木立の中に、真白な辛夷こしがしの花がちらほらと咲き始めた午下りのことでありました。「上巻167⑤」
- 鈍色の空に朝からちらちらと小雪の舞う、寒い日のことでした。「上巻232⑦」
- 盛岡の桜は石ば割つて咲ぐ。盛岡の辛夷は、北き向いても咲ぐのす。んだば、おぬしらもぬくぬく春ば来るのを待つではねえぞ。南部の武士ならば、みごと石ば割つて咲げ。盛岡の子だれば、北き向いて咲げ。春に先駆け、世にも人にも先駆けて、あっぱれな花こば咲かせてみる。「上巻339⑮」
- (南部盛岡は日本一の美しい国でござんす。西に岩手山がそびえ、南には早池峰はやちね。北には姫神山。城下を流れる中津川は北上川と合わさつて豊かな流れになり申す。春には花が咲き乱れ、夏は緑、秋には紅葉。冬となりやあ、真綿のごとき雪こに、すつぽりとくるまれるのでござんす)「下巻69②」
- 日ざかりの中に佇む十四歳のみつは、雫石姉ツ子と譚われた亡き母に生き写しでありました。人目も憚らずにみつを抱き止めたとき、忘れかけていたふるさとの景色が、まるで袱紗ふくさを解いたようになりありと瞼の裏側に甦よみがえりました。 南部の母なる北上川の流れの彼方に岩手山がそびえ、不来方の御城ごしろの向こうには艶あでやかな裳裾もすそを曳いた姫神山が見えた。幼いころ、寝物語に聞いた二つの山の伝説のように、私はこのおなごを心の底から恋い慕おうと誓いました。「下巻147②⑥」

- 長坂の峠の麓に、黄金こがね清水と呼ばれる湧水があります。(中略)ちようどそのとき、東の山の端から月が昇つて、凍えた灌木の茂みやら雪の道やらを、あかあかと照らし出したのです。掌の中の清水はまこと黄金のごとく輝きらきました。「下巻133⑬」
- 霰みぞれまじりの空が鳴る、凍しほれる晩ばんじやつた。「下巻157⑨」
- 雪解けの岩手山おやまじや。南には早池峰はやちね。北には姫神山。北上川と中津川の合わさるその先に、不来方こずかたの御城が。どこも変わらぬ、昔のままじや。北山の辛夷こしがしも、石割桜も、梅も、菜の花も、みないつへんに咲いておるではねえか。「下巻264⑤⑧」
- きらきらと舞う氷の粒の中に、岩手山が聳こぞえていた。右手には不来方こずかたの城下じょうかの麓ふもとが真白な雪に埋もれておりました。「下巻358⑤」
- 夕映えの岩手山おやま。南には早池峰はやちね。北には姫神山。北上川と中津川の合流する先に、不来方こずかたの城跡も望めます。 ああ、何と美しい町でしょう。「下巻365⑧」

今最も旬な時代小説

二〇一二年現在、最も注目されている作品はどんな作家のどのような文章表現なのだろうか?。冲方 丁つづかた とう、一九六六年大学在学中に「黒い季節」で第一回スニーカー大賞を受賞しデビューし、初の時代小説『天地明察』(角川書店刊)で第三一回吉川英治文学新人賞を受賞した。此の作品はどうだろうか……。

《ことばの実際》

○ ざわめきが起おこり、それが徐々に鎮しずまってゆく中、ふいに春海はるみは遠くから響く音を聞いた。からん、ころん。軽妙に鳴り響く、幻の音だ。「序章7頁⑮⑰」

○その毛利が、塾で教科書として用いた『算用記』に、自ら記した序文がある。そしてその中で、割算の起源を、このように説明した。『「寿天屋辺連」という所に、智恵と徳とをもちたらず木であつて、その木には含霊なる果実がなつてゐる。その果実の一つを、人類の始祖である夫婦が、二つに分けて食べたことが、割算というものの始まりとなつた』とのことである。「寿天屋辺連」とはユダヤのベツレヘムを意味する。明らかに旧約聖書のアダムとイヴの楽園追放のくだりと、新約聖書のベツレヘムのくだりを、ごつちやにしている。「お主、切支丹の教えに詳しいか?」「は……いえ……。恐れながら、不勉強にて、まったく分かりませぬ……」春海は恐縮しているが、もし頑張っていたら大変なことになる。昨今では、海外貿易の統制とともに禁教令が厳しく適用され、切支丹と疑われれば投獄は免れない。「第一章・一瞥即解69頁②〜⑬」

○では渋川春海としてはどうか。まだ誰にも告げたことはないが、実は、その名の由来は、とある歌によつた。

雁鳴きて 菊の花咲く 秋はあれど 春の海べに すみよしの浜

という、『伊勢物語』の歌から、春海という名が生まれた。他にも、助左右衛門なども称したことがあるが、春海の名は別格だった。真実、己が頭れていた。雁が鳴き、菊の花が咲き誇る優雅な秋はあれども、自分だけの春の海辺に、「住み吉」たる浜が欲しい。それは単に居場所というだけではない。己にしかせない行いがあつて初めて成り立つ、人生の浜辺である。「第一章・一瞥即解72頁⑮〜73頁⑧」

○一方で、玉川の開削計画が始められたのは、承応元年、振り袖火事のほぼ四年前である。玉川沿いにある羽村から四谷まで、起伏の少ない関東平野で水路を開削するという、とてつもない難事業だった。さらには四谷から江戸城内のみならず、山の手や京橋にまでいたる給水網を、縦横に設置するという大工事が行われた。それが、わずか一年余で通水成功となつた。水不足に悩んでいた江戸の者たちは、武士も町人も感極まり、身分を問わず幾日にもわたつて盛大な乱痴気騒ぎを繰り広げていたという。「第二章算法勝負81頁⑪〜⑬」

○伊勢暦はもっぱら伊勢神宮の御師たちが頒布し、その権威、また日本全土に普及する知名度の高さから、伊勢特産の箸や櫛、金物や織物などにも増して重宝がられる一品だ。「第二章・北極出地192頁⑨⑩」

○ちなみに江戸では幕府公認の「三嶋暦」が一般的で、これは伊豆国にある三島大社の河合家が遍暦しており、その起源は源頼朝にまで遡るといふ。かなり昔から版木を用いて刷られているため、版木による暦全般を指して三嶋暦と呼ぶ者もいるほどで、その権威は伊勢暦に勝るとも劣らない。「第二章・北極出地193頁④〜⑧」

○御相手は、「水戸の御屋形様」こと水戸光国公である。常陸国水戸藩の二代目藩主で、のちに水戸光圀と改名し、言中納言、つまり、「黄門様」となり、やがて江戸の民衆の間で、漫遊譚の主人公として愛されることになる人物である。非常に大柄で、威にして厳たる相貌、剛健たる三十九歳。「第三章・授時暦258頁⑰〜259頁①」

○また光国が愛飲するのは、血のように赤く、茶渋のような味がある、南蛮物の酒である。珍陀酒(ワイン)とかいうそれを、得体の知れない乳製品や、様々な獣の肉とともに、招いた者たちに振る舞う。美食家というより織田信長なみの新しもの好きである。乳製品にしる、豚や羊の肉にしる、日本人の味覚からすれば、げてももの良いとこらだった。「第三章・授時暦260頁②〜⑤」

○『天文分野之図』延宝五年の冬から七年の夏にかけて江戸や京などで書として出版された「日本の分野」は、まさに全国規模の注目を受けた。精密な天測と運行の計算とに裏打ちされた星図の全てが、全国各地の大地に照応されており、星々の位置やその蝕などから、各地の「吉凶」が一目瞭然となる。春海のこれまでの技芸、そして神道の教養の集大成であつた。その出来映えに、江戸の天文家、京の陰陽師、各地の僧たちが揃つて唸つたという。そればかりか、巻物の装丁を生業とする経師たちが、春海の『天文分野之図』を、一つの美とみなし、何の関係もない本の表紙に流用したのである。それにより、さらに天文暦術や数理とは無縁の人々の間にも、「天文図」が一挙に流行したのだつた。春海も、その成果というか、ちよつと想像しなかつたものを闇齋が手に

入れ、面食らつた。なんと美人画である。背景や着物の柄に「天文図」があしらわれていた。そればかりか絵の主役である女が、婀娜つばい様子で読んでいる本そのものが、『天文分野之図』なのである。「第四章・天地明察426